栗東市文化財調査報告書第200冊

滋賀県栗東市

霊仙寺遺跡発掘調査報告書

令和４年度１次調査

令和５年（2023）６月

栗　東　市　教　育　委　員　会
公益財団法人栗東市スポーツ協会

栗東市文化財調査報告書第200冊　滋賀県栗東市　霊仙寺遺跡発掘調査報告書　令和４年度１次調査　令和５年（2023）６月　栗東市教育委員会・公益財団法人栗東市スポーツ協会

例　　言

1　本書は、滋賀県栗東市小平井三丁目353番一部、355番、349番４において実施した、霊仙寺遺跡の発掘調査報告書である。

2　調査は、現地調査を令和４年11月28日から令和４年12月20日まで、整理調査を令和４年11月28日から令和５年６月30日までの期間で実施した。

3　調査体制は、以下のとおりである。

調査主体	栗東市教育委員会事務局	教育長	安土　憲彦
		教育部長	川﨑　武徳
		教育部次長（兼スポーツ・文化振興課長）	小山　領一
	スポーツ・文化振興課　文化財保護係	課長補佐	駒井　美香
		係　長	雨森　智美
		主　幹	藤岡　英礼
調査機関	公益財団法人栗東市スポーツ協会　事務局	会　長	宮城　安治
		局長代理	千代　友厚
	文化財調査課	課長補佐	近藤　　広
		係　長	佐伯　英樹
		技　師	遠藤あゆむ
		技　師	末次由紀恵
		専門員	森　　智美

5　現地及び整理調査への参加者は、以下の通りである。

調査補助員　柴原慶子　三浦典江　山本明日香　横江絵理　西村江美子　泉水聖子

整　理　員　大橋有希　神代園子　武本早紀

6　本書の執筆は、第一章第一節を藤岡英礼が、ほかを遠藤あゆむが行った。編集は遠藤が担当した。

7　遺構写真及び遺物写真は遠藤が撮影した。

8　本書で使用した標高はＴＰ（東京湾平均海面高度）である。

9　出土遺物や写真・図面については栗東市教育委員会（栗東市出土文化財センター）で保管している。本調査の調査管理番号は２０２２Ｒ０３３－０１である。

第１章　はじめに

第１節　調査に至る経緯

栗東市小平井三丁目353番一部・355番・349番４において西田　正信氏により、共同住宅建設工事が計画された。当該地は霊仙寺遺跡に位置する事から、令和４年９月21日付けで埋蔵文化財発掘届と調査依頼が提出された。これにより栗東市教育委員会が令和４年11月11日に試掘調査を実施した結果、溝や落ち込みを確認したことから発掘調査を実施することとなった。

現地発掘調査は栗東市教育委員会を調査主体に、公益財団法人栗東市スポーツ協会を調査機関として、令和４年11月28日から令和４年12月20日の期間で実施した。

第２節　位置と環境

霊仙寺遺跡は、野洲川が形成する扇状地上に位置しており、栗東市内では琵琶湖側にあたる。縄文時代中期から近世に至るまでの遺構遺物が確認されている。今回の調査地は霊仙寺遺跡小平井地区にあたり、近隣の調査実績として2005年に道路拡張に伴う発掘調査、2003年、2007年に宅地造成に伴うものがある。今回の調査地は2007年度２次調査の延長部分に当たる。

上記の調査の中で、小平井地区は飛鳥時代の瓦や無文銀銭が見つかっている他、大規模な区画溝を検出している。旧字名でも蛭子神社を中心に「堂ノ東」「堂ノ西」といった地名が残っていることから、先述の遺物と合わせて古代寺院（小平井廃寺）が想定されている。2007年の調査では多くの歪んだ瓦、炉か窯跡とみられる遺構も検出されており、小平井廃寺と目される遺構群に付随してこれらの生産関連遺構がみつかっていることは、当該地域の大きな特徴として挙げられる。

第１図　調査地位置図

第２章　調査の成果

第１節　調査の経過

調査対象面積は約249.85㎡で、重機による表土掘削を開始し、表土除去後、人力による遺構の掘削及び作図、記録撮影を行った。調査終了後、重機によって埋め戻し作業を行った。その後、出土遺物や図面、報告書作成などの整理調査を令和５年６月30日まで行った。

第２節　基本層序

調査区内の基本層序は、上層から順に層厚0.4mの造成土、層厚0.4mの旧耕土、層厚0.2mの浅黄色シルト土、第一遺構面である層厚0.2mの灰色シルト土の後、第二遺構面かつベース面であるオリーブ灰色シルト土に至る。灰色シルト土は埋土中に遺物を包含する。周囲の標高は約90m、第二遺構面の標高は約89mである。

第３節　検出遺構・遺物

調査区内で検出した遺構は灰色シルト土から切り込むものと、オリーブ灰色シルト土から切り込むものがある。いずれの遺構も埋土中からの遺物の出土量は少ない。

ＳＤ０１　ほぼ正南北を指向し、調査区内でほぼ直角に東方向へ折れ曲がる。幅約0.5m、深さは約0.6mであり、遺構は上層から灰色シルト土から切り込んでいる。遺構埋土中からは高坏（１）、須恵器（２）、石鏃（６）、瓦（７）、土師皿、黒色土器の細片が出土しているが、遺構の方位が条里方向ではなく正方位を指向すること、周辺の調査で多量の軒丸瓦を含む瓦片が出土していることから、遺構の開削時期は飛鳥時代以降と考えられる。

１は土師器の高坏脚部で透かし孔を３個持つ。２は須恵器壺の口縁部である。６はサヌカイト製の有茎石鏃である。７は平瓦片で、内部に布目痕、外部に縄目痕を残す。

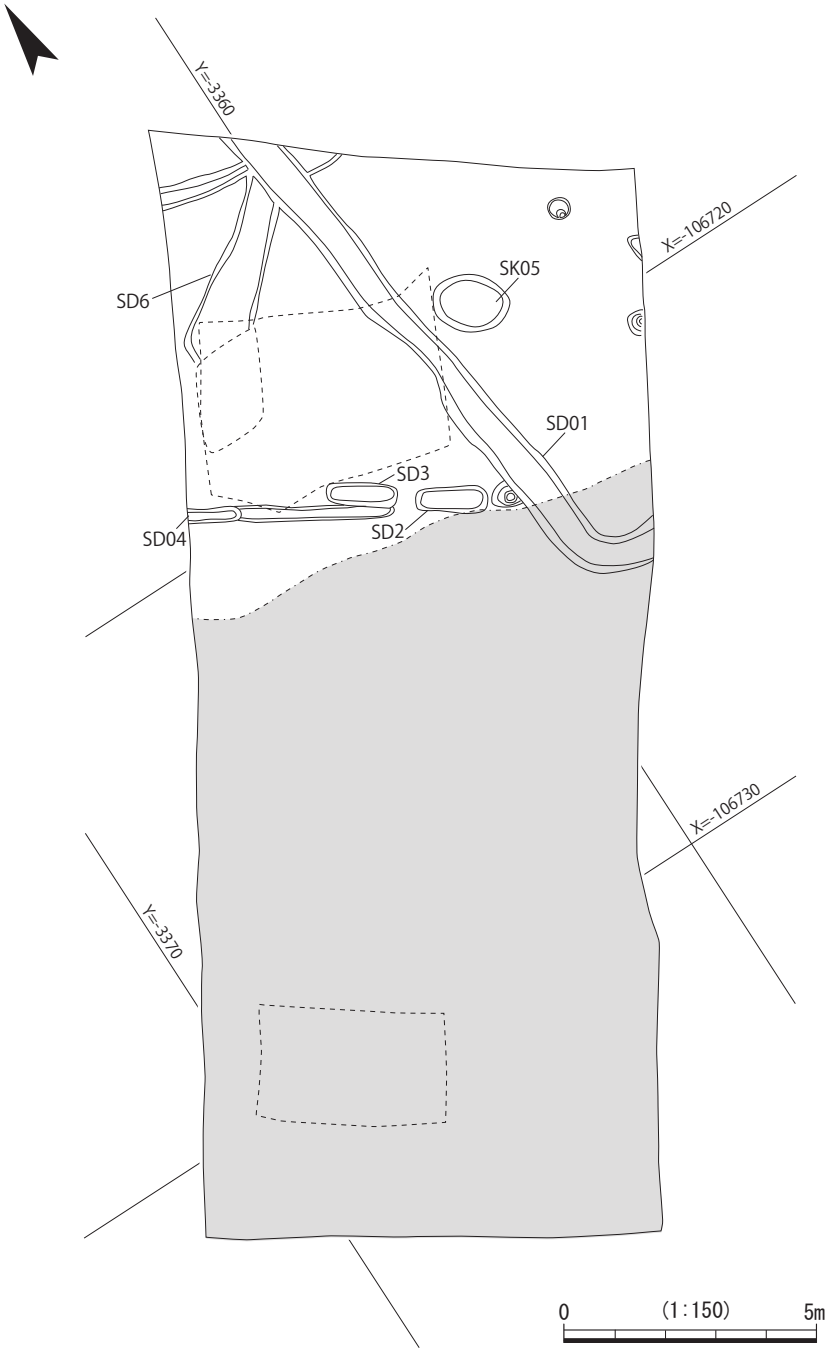
ＳＤ０２・０３・０４　中世の耕作溝とみられ、灰色シルト土から切り込む。いずれも溝幅は約0.2m、深さ約0.2mで条里方向を指向する。埋土中に遺物は含まれなかった。

ＳＫ０５　直径約1.5m、深さ約0.2mの土坑である。遺物は僅かに土器細片が見られる程度で、時期の特定は難しい。オリーブ灰色シルト土から切り込む遺構であることから、層序から飛鳥時代以前の遺構とみられる。

ＳＤ０６　ＳＤ０１に切られる形で検出された。幅約１m、深さ約0.3mで、こちらも遺物は細片のみで、ＳＫ５同様層序から飛鳥時代以前の遺構とみられる。

まとめ　今回の調査では北東側半面部に飛鳥時代以降とみられる遺構、残る南西側は沼沢地と思われる落ち込みが検出された。沼沢地の遺物量はほぼ無く、活用された痕跡はみられなかった。調査区内北東側も、遺構量、遺物量共に少なかったが、正方位を指向した溝が検出された他、軒丸瓦も少量であるが出土するなど、周辺の調査成果と年代観が合致する遺構、遺物がみられた。

一方で2005年、2007年の調査で見られた瓦溜まり、窯壁等の生産関連遺物がみられない他、遺構量、遺物量ともに近隣の調査と比べて少ない傾向にあった。この傾向が古代寺院とそれに関連する遺構群の南限を示すものか、遺跡内の空閑地のみを調査した成果であるかは今回の調査成果だけでは不明である。今後、周辺の調査成果が加わることにより、今回の調査成果と合わせてより詳しく霊仙寺遺跡小平井地区の遺構範囲が明確になることに期待したい。



第２図　遺構平面図

上層遺構検出状況（西から）

上層遺構完掘状況（南から）

下層遺構検出状況（南西から）

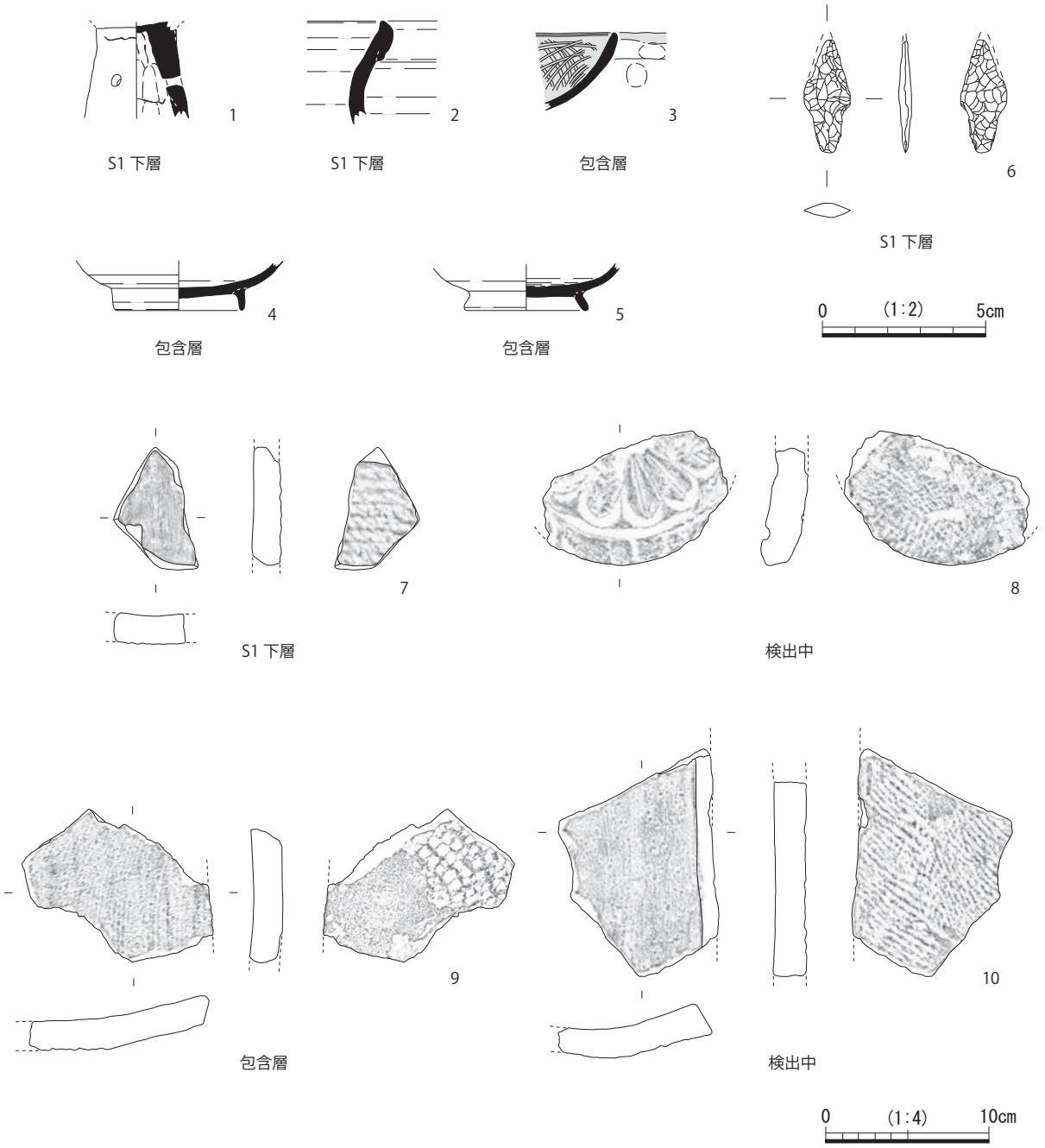
下層遺構完掘状況（南から）

SD01断面状況

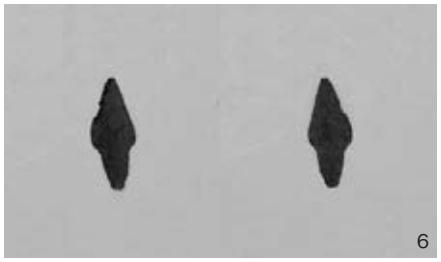
石鏃出土状況

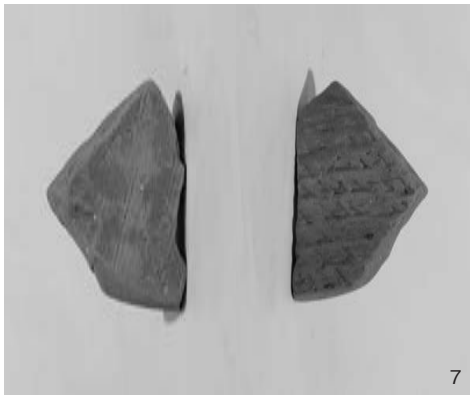
沼沢地断割断面状況

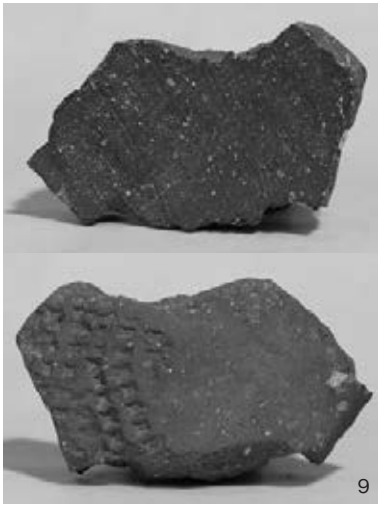
沼沢地断割状況（北から）

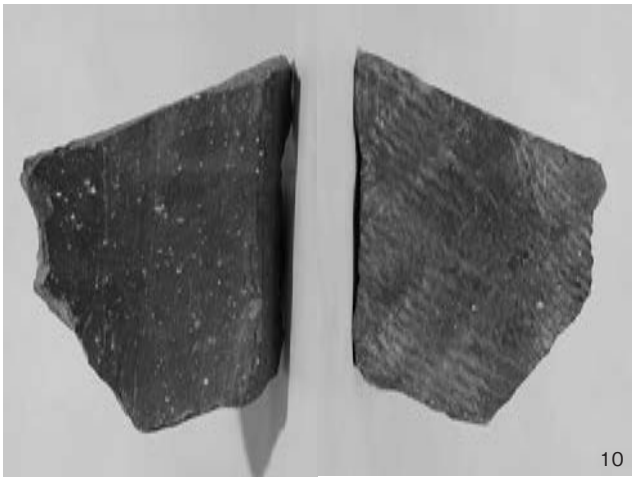

1
S1 下層
2
S1 下層
3
包含層
6
S1 下層
4
包含層
5
包含層
0 (1:2) 5cm
7
S1 下層
8
検出中
9
包含層
10
検出中
0 (1:4) 10cm

第３図　出土遺物実測図









遺物写真

報告書抄録

ふりがな	りょうせんじいせき
書名	霊仙寺遺跡
副書名	令和４年度１次調査
巻次	
シリーズ名	栗東市文化財調査報告書
シリーズ番号	第200冊
編著者名	藤岡英礼（栗東市教育委員会）　遠藤あゆむ（栗東市スポーツ協会）
編集・発行機関 所在地	栗東市教育委員会 滋賀県栗東市安養寺三丁目１－１
	公益財団法人栗東市スポーツ協会　文化財調査課 滋賀県栗東市下戸山47　栗東市出土文化財センター内
発行年月日	令和５年（2023）６月30日

ふりがな 所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	現地調査期間	調査 面積	調査原因
		市町	遺跡番号					
りょうせんじ 霊仙寺	滋賀県栗東市 小平井三丁目 353番一部 355番 349番４	208	012	35° 3′ 80″	135° 96′ 30″	令和４年12月20日 ～ 令和５年６月30日	249㎡	集合住宅 建設工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
りょうせんじ 霊仙寺 2022R033-01	寺院 集落	弥生時代 飛鳥時代 奈良時代	土坑 ピット 溝	石鏃 土師器 須恵器 瓦	

要約	弥生時代の石鏃と奈良時代の溝を発見。

栗東市文化財調査報告書第200冊

霊仙寺遺跡

令和５年（2023）６月30日

編集・発行　栗東市教育委員会

〒520－3015　滋賀県栗東市安養寺三丁目１－１

電話 077－551－0131　FAX 077－552－5544

公益財団法人栗東市スポーツ協会

〒520－3011　滋賀県栗東市下戸山47番地

栗東市出土文化財センター内

電話 077－553－3359　FAX 077－553－3514

印刷・製本　株式会社スマイ印刷

東東市文化財調査報告書第200集

溝ノ口遺跡

雲伝寺遺跡発掘調査報告書

令和4年度1次調査

令和5年（2023）6月

東東市教育委員会・公益財団法人東東市スポーツ協会